学融合推進センター
The Center for the Promotion of Integrated Science
CPIS

CPIS NEWS

No.17

目次
CPIS NEWS
・新しくなった CPIS サイト
・地域を知る総研大レクチャー
・変わる学融合研究事業
・留学気分で学術交流
・這い上がれ研究者入門
CPIS Topics
・つながる学融合研究事業
CPIS Team
沓掛展之　岩瀬峰代
CPIS Schedule

新しくなったCPISサイト

図は次のページ

2014 年 5 月 12 日に学融合推進センターの web サイトがリニューアルいたしました。リニューアルサイトでは、学融合推進センターが行う多様な全学的活動を素早く、見やすく、分かりやすく、学内の皆様に情報発信してまいります。

それではリニューアルサイトについてご説明いたします。サイトの最上部右には、「総研大生関連情報」、「総研大教職員関連情報」、「English」のアイコンを設けております（画像-１）。「総研大生関連情報」のアイコンをクリックすると、総研大レクチャーや学生企画など、総研大生が参加可能なイベント等の情報がピックアップされ、紹介されております。同様に「総研大教職員関連情報」では教職員向けの、「English」では留学生向けの情報がピックアップされております。そのすぐ下は、最近行われたイベントの報告です（画像-2）。雰囲気が伝わるよう、写真とともにイベントの様子を紹介しております。ページ左はメニュー（画像-3）とバナー（画像-4）を配置しました。メニューをご覧いただくと分かりますが、今回新たに「学融合のひと・こと」と題したブログを設けました。こちらのブログでは速報性の高い情報と学融合推進センターの日々が垣間見えるような情報を発信しております。バナーは、関連するページへのリンクや特に注目していただきたいイベントや募集などへのリンクになっております。ページ右側がメインコンテンツとなっております。トップページ上部には「研究者交流掲示板」という企画へのリンクがあります（画像-5）。学際研究のアイデアを持っているが、それを実現するための研究者を知らない、などの場合、この掲示板で募集を行い、出会いの場としてご活用ください。トップページメインコンテンツの左では、「Information」として、イベントや募集などをお知らせしております（画像-6）。トップページメインコンテンツの右には月間カレンダーと年間カレンダーを配置しました（画像-7）。学融合推進センター関連のイベントはこちらでご確認ください。

見づらい、分かりづらいなどのご指摘から、こんな企画をやったら面白いんじゃないの、といったご助言まで、お気づきの点がございましたら担当の塚原（tsukahara_naoki@soken.ac.jp）までお気軽にご連絡ください。

（文責　塚原直樹）

総合研究大学院大学
学融合推進センター CPIS
The Center for the Promotion of Integrated Sciences
1
総研大生関連情報
総研大教職員関連情報
English
2
国際コミュニケーション II June 2014
JPSサマープログラム II June 2014
フレッシュマンコース 8 April 2014
過去のイベント
3
Home
学融合推進センターとは
センター構成員
学融合のひと・こと(ブログ)
センターの事業と活動
アクセス
4
総合研究大学院大学
H26年度研究事業
新規公募開始
学長に学融合研究事業改革を聞く
研究者交流掲示板
kenkyusya tokei
2014 UST-Sokendai Joint Seminar on Computational Sciences
総研大研究プロジェクト企画会議
5
研究者交流掲示板
異分野連繋型の研究プロジェクト創出のため、
「●●の専門家を探してます」や「●●の技術を持った研究者募集」など、
この掲示板を出会いの場としてご活用ください。
▼CLICK
6
NFORMATION
ブログ更新　NEW
ブログ更新しました。
【お知らせ】公募型研究事業に関するよくある質問　NEW
公募型研究事業についてよくある質問を掲載しました。 詳しくはこちら
【お知らせ】繋がる学融合研究事業 ～学長に学融合研究事業改革を聞く～　NEW
公募型研究事業の枠組みの改訂について、岡田学長にインタビューを行いました。 詳しくはこちら
【募集】総研大レクチャー「日本歴史研究の方法A－資料調査法－2014年度」の開講について　7/14〆切
平成26年7月30日(水)～8月1日(金)に国立歴史民俗博物館にて開催予定の「日本歴史研究の方法A－資料調査法－2014年度」の受講希望者を募集します。 詳しくはこちら
【報告】研究事業公募説明会　NEW
7/7(月)に品川にて研究事業の公募説明会と研究交流会を開催しました。 詳しくはこちら
【募集】公募型研究事業新規募集　8/8〆切
平成26年度公募型研究事業の新規募集を開始しました。 詳しくはこちら
【募集】萌芽的研究会開催支援　12/31〆切
平成26年度萌芽的研究会開催支援の募集を開始しました。 詳しくはこちら
【募集】論文出版費補助　2/28〆切
平成26年度の論文出版費補助の募集を開始しました。 詳しくはこちら
【お知らせ】研究者交流掲示板　NEW
研究者交流掲示板を開設しました。異分野の研究者との出会いの場としてご活用ください。 詳しくはこちら
【お知らせ】葉山セミナー「実験室(ラボ)とは？」
2014年7月23日の15時より葉山キャンパス学融合推進センター棟2階クリエイティブルームにて、学融合推進センター特任准教授の荻地先生による葉山セミナー「実験室
7
SCHEDULE
6月 ←　2014年7月　→ 8月
月 火 水 木 金 土 日
葉山セミナー
日本歴史研究の方法 C
日本歴史研究の方法 A
UST-総研大「計算科学」共同セミナー
2014年度 学融合推進センター年間行事

CPIS Event

地域を知る総研大レクチャー

日本歴史研究の方法 B
－地域研究の方法－

総研大レクチャー「日本歴史研究の方法 B－地域研究の方法－2014 年度」がこのたび開講されました。本事業は、実際のフィールド、特定の地域や博物館における歴史・考古・民俗の資料を具体的に見学、確認しながら、文献史学・考古学・民俗学・分析科学の視点で調査、分析し、地域社会に還元する方法を学ぶことを目的としています。

2014 年度は鹿児島県鹿児島・屋久島を舞台に授業が行われました。まず鹿児島大学と共催で、総研大主催の公開講演会「豊かで厳しい自然と向き合いながら暮らす南九州地方の人々」を鹿児島大学稲盛会館で行いました。鹿児島大学の井村隆介先生は地球物理学の観点から南九州の自然史を語り、来るべき噴火に備え防災の必要性を説かれました。鹿児島の人々の生活を調査されている鹿児島純心女子短期大学の橋村健一先生は、シラス台地の地形を利用した鹿児島の人々の暮らしの知恵についてお話しくださいました。講演後は、総研大生と交流会が設けられ、防災教育のための手法や、鹿児島の地形に関する質問などが学生から出されました。

国有林での調査

その後、舞台を屋久島の国有林に舞台を移して、世界自然遺産であっても人々と自然には長期にわたって関わりがあったことを、フィールド演習を通じて学習しました。

そびえたつ屋久杉

（文責：奥本素子）

変わる学融合研究事業

平成 26 年度学融合推進センター研究事業説明会・研究交流会

岡田学長より改革の説明がありました。

学融合推進センターでは、平成 26 年度の研究事業の新規公募を開始しました。今年度は、総研大のテーマである「異分野連繋」、「社会連携」、「基盤機関連係」、「国際連携」を軸に、「グローバル共同研究」、「学融合共同研究」の二つの事業を募集しております。それに伴い、7 月 7 日(月)に、品川インターシティ貸会議室にて研究事業公募説明会が開催され、多くの方にご参加いただきました。

公募説明会ではまず岡田学長より、研究事業公募の趣旨説明についてご説明いただきました。今回公募する研究事業を通じて、葉山と基盤専攻の研究者が国際的な共同研究から、総研大発の新しい分

野の創出を目指すことや、学生や修了生を参加させることで、学生の広い視野や総研大生のネットワークの形成・維持を作り出す、という総研大の新しい構想は、参加者からも多くの共感を得られたようです。続いて生命共生体進化学専攻の田辺准教授により、「グローバル共同研究」、「学融合共同研究」の二つの研究事業と、共同研究のシーズを支援する為の「萌芽的研究会開催支援」についての概要の説明がありました。質疑応答の時間では、沢山の参加者から申請の際の注意点や、応募の条件について、具体的な質問が出され、関心の高さが読み取れました。最後に、昨年度採択された「戦略的共同研究 I」の研究代表者である日本文化研究科の野林教授に、「学融合推進事業の立案について—生態資源と文化との関係を探究する切り口としての”料理”」についてご講演いただきました。「料理」を通じての考古学・人類学・情報学の融合研究、という総研大ならではの幅広い研究について、研究の目的と学融合研究の立ち上げまでの経緯やこれまでの進展状況をお話いただきました。

公募説明会終了後は、野林先生のフィールドである、台湾の食材を囲み、交流会が行われました。台湾食材は、学融合推進センターの塚原助教と学生さんが台湾料理の専門店から手に入れ、苦労して会場に運んでくれたものです。台湾では、通常のビールに加えて、台湾ビールにはマンゴーやパイナップルなどフルーツビールが有名だそうです。日本にも多くのファンがいるようで、その人気のため一時は品薄状態が続いていたそうです。マンゴービールを味見してみると、フルーティで飲みやすく、「女性に人気」というのも納得の美味しさでした。また、真っ赤な色をした紅腐乳や、台湾ピータンなど、珍しいおつまみを囲みながら各々の話が咲き、盛況のうちに懇親会の終了の時刻となりました。

学融合推進センターでの交流会ではこのように、様々な分野の参加者がリラックスした中で会話を楽しむのも目玉の一つです。今回の交流会でも、新しい学融合研究のシーズが生まれたようです。今年度の学融合公募事業の締め切りは 8 月 8 日(金)です。萌芽研究会支援は随時募集中ですので、研究会の開催をお考えの方は是非ご応募ください。公募事業の詳しい内容及び質問等は、センターウェブサイトをご確認ください。

http://cpis.soken.ac.jp/project/research/koubo/faq.html

（文責：小松睦美）

朗らかに乾杯する皆さん

留学気分で学術交流

JSPS サマー・プログラムと総研大レクチャー（国際コミュニケーション）

JSPS サマー・プログラムに参加しているアメリカ合衆国、英国、フランス、ドイツ、スウェーデンなどの欧米諸国から博士号取得前後の若手外国人研究者（フェロー）と一緒に 3 日間を過ごす国際コミュニケーションは、ちょっとしたミニ留学といった感のある総研大レクチャーです。

フェローと一緒に過ごすのは、日本の研究を紹介する「特別講義」、茶道・書道・折り紙・着付けを実際に体験する「日本文化紹介」、そしてそれぞれの研究テーマを発表するポスターセッションです。これまでの参加者の中にはここで知り合ったことをきっかけにフェローの滞在期間中とそれぞれの言語を教え合ったりすることもあったそうです。

このプログラムのメインはポスター発表です。ちょっとした学会並みの議論が行交うこのセッションで、いかにうまくプレゼンでき

るかが、参加者の目標です。そのため、ネイティヴの講師の方からフィジカルスキルや印象の残る説明方法、様々な質問に対応するスキルなど、しっかりと習います。

今年度は生物系、物理系、情報系、統計数理系、美術系の学生 10 名が参加しました。この期間中、英語のプレゼンテーションスキルはもちろんのこと、日本文化の一つ茶道についても、一緒に練習したり、教え合ったり、そしてポスター作成を手伝ってあげたり、参加者同士は分野を超えた濃い交流の時間を過ごします。

このように、総研大レクチャー（国際コミュニケーション）は、『JSPS サマー・プログラム』を利用した洗練されたプログラムになっています。しかし、このような形になるまで試行錯誤がありました。「日本文化紹介」のセッションに参加しても折り紙の折り方をフェローに教えられなかったり、参加者の満足を得られなかったり。そんなことがあるたびに折り紙を事前にレクチャーしたり、英語のレクチャー形式を変えてみたり、様々に工夫をしました。その結果、今年も参加した参加者全員、満足したというアンケート結果を貰っています。

このレクチャーの最大の効果は、参加者はが、このレクチャーの後、海外へ飛び出して行っていることです。物怖じせず、様々な国の研究者と対等に付き合える第 1 歩を歩み出しているのです。今後もこのレクチャーを利用して、総研大生が世界に飛び出して行くことを期待しています。

（文責：岩瀬峰代）

這い上がれ！研究者入門

研究者入門 2014

今年も、アカデミックキャリアのためのキャリア合宿、研究者入門が開催されました。

今年はより多くの人に参加してもらえるよう 1 泊二日の短期集中型授業に組み替え、キャリアを学ぶワークショップと研究者の先輩である先生や修了生の講義、そして研究倫理を考える哲学カフェの 3 部構成で開催しました。

最初は漠然と研究者になりたいという希望や、もしくは研究者になれるのかという不安を抱え参加した参加者たち。最初に、自分自身をアイドルやドラマのキャラクターで考えてみるという、アナロジー思考法ワークショップ「私は女優よ」を行いました。自分はどのようなキャラクターなんだろう、そしてそのようなキャラクターが活躍できる場面とは、と考えながら、意外にマネージメントに興味があったり、確実な技術を持った職人気質の存在に憧れていたりと自分の新たな一面を発見していきました。

その後、基礎生物学研究所名誉教授の西村幹夫先生、夜には現在若手研究者として活躍中の修了生 5 名をお呼びして、濃いいキャリア談を伺いました。ピンチはチャンス、人脈の大切さ、言葉では理解しているものの、具体的な体験談を通して語られると、迫真性をもって伝わります。

次の日は上智大学の寺田俊郎先生がファシリティトをして、考える研究者倫理を考えました。なぜ剽窃してはいけないの？知的財産ってどうして保護されているの？ルールではなく、倫理で著作権のことを考えていきました。

最後に参加者からは、キャリアが長期に渡ることに気づいた、今とは違うかかわり方で学術に貢献したいなど様々な感想が科誰れました。

毎年、参加者は夜遅くまで語り合い、自分の未来を少し掴んで帰っていきます。

（文責　奥本素子）

CPIS Story

繋がる学融合研究事業

～学長に学融合研究事業改革を聞く～

＜話し手＞
岡田（総合研究大学院大学　学長）
＜聞き手＞　奥本素子

インタビューに答える岡田学長

―今回、学融合推進センターが共同研究に助成する学融合研究事業の枠組みが改訂されましたが、その概要を教えてください。

岡田学長（以下、学長）　今回、学融合研究事業の応募枠を 2 つに絞りました。一つは、総研大を代表するグローバル共同研究で、もう一つは、それより規模の小さい学融合共同研究であり、いずれは異なる分野をまたぐ共同研究です。グローバル共同研究は、①葉山キャンパスと基盤専攻の教員の参加、②学生又は修了生の参加、③国外研究機関の参加が義務付けられています。年間 1 千万円の上限で、最長 3 年間の共同研究を実施することができます。

―共同研究の枠組みが広がったのですね。

学長　基盤機関でも現在研究所の枠を超えた共同研究が推進されています。総研大ではさらに基盤を超えた学際研究を支援することがミッションだと思われます。その際、葉山の教員が共同研究に積極的に関与し、総研大発の共同研究を発展させると共に、基盤機関の研究者同士をつなぐ役割を担う必要があるのです。

―葉山本部が中心となって総研大の新しい研究分野創出を担っていくのですね。

学長　そうです。私は 4 つのレンケイを総研大のミッションに掲げています。その一つが異分野連繋です。新しい学問は必ず分野を超えたつながりから生まれてくるものです。そのつながりを生み出すためにも、二つ目のレンケイである基盤機関連係が必要になります。その連係の促進役を担うのが葉山キャンパスなのです。

―学融合研究事業の枠組みがそのまま二つのレンケイに繋がっているということですか。

学長　そうです。また、国内外、特に海外の大学、研究機関の研究者を参加させることが条件になっています。それは今後総研大が掲げる国際連携を推進する具体策の１つとしての意味合いもあります。総研大は先端的かつ新規性の高い研究を日本においても先駆けて創出できるリソースがある大学です。学内連携のみならず、総研大がイニシアティブをとって日本、世界の研究をけん引していくことを目指しています。

―なるほど、総研大の存在感を高めることになりそうですね。

学長　葉山の教員の中には、社会と科学の研究者もいます。彼らと共同研究することによって、最後のレンケイである社会連携を実現していただきたいと思います。

―学融合研究事業が持つ機能を整理され、発展されたのが今回の改革と捉えていいのでしょうか。

学長　そうです。また、今回共同研究の中に学生又は修了生を参加させることを条件としています。このような共同研究に学生の間から参加することは、研究者としての広い視点を養うと思います。また、修了生と共同研究をすることによって、修了生と総研大とのネットワーク形成維持にもつながると思います。

―学融合研究事業が学融合教育事業や学術交流事業にもつながるわけですね。

学長　単独で研究事業を運営するわけでなく、学融合推進センターの事業の有機的つながりも意識しています。

―先生方からは学生に博士研究以外に参加させることに慎重な意見もあるようですが。

学長　学融合研究事業を通して、

学生が成長していく過程を見せていくことで、そのような懸念も解消されていくのではないでしょうか。

―本事業を通して新しい研究を立ち上げようとされる先生から、自分たちが立ち上げた共同研究が本当に研究として成り立つのか不安である、という質問が上がっています。

学長　確かに始めからグルーバル共同研究に応募できる体制が整っている共同研究だけではないと思います。そのため、その準備時期を支えるものとしても学融合共同研究という枠組みを設けています。学融合共同研究は、研究科もしくは機構が異なる研究者同士、または葉山と基盤専攻の研究者が共同で研究する事業に助成されます。年間 400 万円の上限で最長 2 年間の共同研究を実施することができます。また、共同研究の萌芽を探るための研究会助成枠もできました。

―研究の進展レベルによって支援の枠組みが用意されているわけですね。

学長　今回の学融合研究事業は、他の大学や他の助成機関の事業では実現できないようなプログラムですので、ぜひこの枠組みを利用して総研大発の新しい分野の創出を目指してもらいたいですね。

―そうですね。どんな研究が生まれるか楽しみです。ありがとうございました。

学融合研究事業の公募詳細案内は http://cpis.soken.ac.jp/project/research/koubo/bosyu.html まで。

（文責　奥本素子）

観相学が切り開く学際研究

＜話し手＞
相田満（総合研究大学院大学　文化科学研究科　日本文学研究専攻）
＜聞き手＞　奥本素子
2014 年 7 月 8 日

観相学の資料

日本文学研究専攻の相田先生が代表を務める「観相資料の学際的研究」は今年で三年目を迎える学融合推進センターが支援する戦略的共同研究事業です。文学研究の枠を超えた学際研究の実態について相田先生にお伺いしました。

―そもそも観相とはなんですか？

相田　観相とは、人の身体・容貌・声・気色を観察して、その性質・禍福を見通すことをいいます。人相占いという言い方の方が耳馴れているのかもしれませんね。

―観相学は日本文化の研究にどう関連するのですか？

相田　観相学は中国から半島経由で、聖徳太子の時代から日本に受け入れられてきました。画家は観相学の知識を肖像画に反映させたといわれています。例えば、権力者は吉相（よい人相）で描かれている場合もあるんです。昔の有名な武将の絵と言われているもの真偽を判断するために、観相学の知識は活用できると考えています。

―なるほど、文献が残っていない絵画資料を調査する際の重要な視点になりうるかもしれませんね。

相田　実は私はこのような文化史的研究に手を染めるようになったのは、当館の文献資料調査で大量の観相資料にふれる機会を得たのが、この研究を始めるきっかけでした。そのことを研究者仲間に話したら、意外にも多くの人が観相学に着目していて、ぜひ一緒にやろうという話になったのです。

―自分の研究を共同研究に広げたというより、たまたま同じ興味を持っていた人たちがいたので共同研究が始まったわけですね。

相田　始めてみると大変奥の深いものだと分かりました。まだまだ日本には安価に購入できる資料が多いので、自費で購入しながら研究を進めています。観相学に関する研究が少ないためか、先日はアメリカの学会からも寄稿を頼まれました。

―中国から渡ってきたという話でしたが、研究面では日本が進んでいるんですか？

相田　というよりも、これまで学術的観点から観相学を取り上げることが少なかったと思います。

本研究では、共同研究の強みを

生かして、文化的側面を国際日本研究専攻の先生にお聞きしたり、画像をどう分析するのかという部分を統計科学専攻の先生にお聞きしたりと学際的に研究しています。

―なるほど、多角的に観相資料を検証しているんですね。相田先生は、どのような研究をされているのですか？

相田　現在、文献資料に記載されている観相学と口頭伝承で伝えられている観相学の相違点を調査するため、観相が盛んな中国や台湾に調査に行きました。また、自分の資料を中心にデータベース化して公開しています。

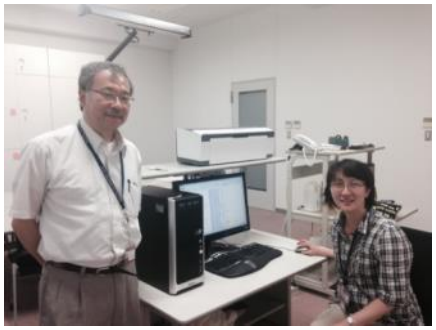
―観相トピックマップス（下図：http://topicmaps-space.jp/physiognomy/）ですね。

相田　古典はもとより、現在、観相学が近現代の文学や漫画などへの影響についても調査中です。調査の一部はリサーチアシスタントとして総研大生にお願いしています。

―観相は現代の文化にも影響を与えているかもしれないということですか。

相田　先日、情報処理学会のマンガセッションで、観相とからめた報告をしたら、多くの人が興味を持ってくれました。研究が広がる予感がしています。

―過去から現在の文化まで包括できるおもしろいテーマだということですね。今後の展開が楽しみです。ありがとうございました。



相田先生とリサーチアシスタントとして研究を支える院生の屋代純子さん

新たな視点を見つける研究

＜話し手＞
長谷川眞理子（総合研究大学院大学　副学長）
＜聞き手＞　奥本素子
2014 年 7 月 28 日

長谷川副学長

生命共生体進化学専攻も併任されている副学長長谷川先生が代表を務める「惑星科学と生命科学の融合：生命概念の普遍化をめざして」は今年で三年目を迎える学融合推進センターが支援する戦略的共同研究事業です。物理学、生物学、文化科学の研究者が研究の枠を超えた地球以外の生命の可能性について話し合う学際研究の実態についてお伺いしました。

―本共同研究は様々な方が関わっておられますが、そもそも研究を立ち上げたきっかけは何だったのですが？

長谷川　もともとはこのテーマは国際高等研究所で行われていた共同研究でした。天文学者を中心に始まったこの共同研究の最終年に私が携わっており、その後総研大でこのテーマを発展させることになりました。それまでの研究は系外惑星探索が主流でしたが、総研大の共同研究にするにあたり、地球外に生命がいたとしたらそれは知性を持ちうるのか、という生物や文化系の視点からも研究を発展していったのです。

―壮大なリサーチクエスッションですね。

長谷川　そもそも、現在の生物学は地球上の生物しか扱っていません。地球の生物は、元々は一つの生命体から進化したものだと考えられます。つまり多様には進化しているのですが、その源流は一つであり、サンプル 1 の生物学といっても過言ではありません。今回、地球外生命体を考えることによって、現在の生物学が取り扱っている生物という概念をより普遍的な視点から考える機会になりました。

―普通の共同研究では出てこない視点ですね。

長谷川　文明を捉える試みも同様です。例えば、高度な知能を持った生命は電波を必然的に利用するようになるのか？という問いがあります。天文学者は電磁波は宇宙に普遍的に存在するので、必ずや

それを発見して利用すると主張します。一方で、地球に生命が誕生したのが 40 億年前、ホモサピエンスの登場が 20 万年前といわれていますが、西洋近代科学が誕生するまでどの生命も、どの文明も電波を利用してきませんでした。本当に電波を利用することは必然なのでしょうか。

―多くの研究者にとって興味深い問ですね。

長谷川　意外にも物理学の先生達がこの様なことを考えることを面白がってくれて、今年で本研究事業は終わりですが、継続の要望が強いんですよ。

―すぐには答えの出ない研究対話というものは科学の本質かもしれませんね。

長谷川　今年度から学融合研究事業は大学院生や修了生にも開かれます。ぜひ、若い人たちにも参加してもらいたいですね。若い頃から分野を超える経験をすると、違う分野の研究者達と話ができるようになります。もちろん、話が合うようにはなりませんよ(笑)。違いを認め合いながら違う立場で話すことができるようになるのです。

―先生はこれまで多くの学際的共同研究をオーガナイズされてきたとお聞きしましたが。

長谷川　JST のプロジェクトで分野をまたぐ共同研究を仕掛けた経験が何度かあります。例えば、認知科学とロボット工学の共同研究です。認知科学者は、脳はとても複雑だと思っているのに、ロボット工学者は計算で処理できると考えているため、議論は平行線のままでした。ただ、最後にロボット工学者が意思決定のためには情動がとても重要だと気が付いたのです。その当時の共同研究者達が現在の日本のロボット工学を今でも牽引していますよ。

―異分野の研究者と対話することにより、分野の中では気が付かなかった新たな観点の発見につながるのですね。ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この場を借りて、貴重なお時間をいただき、お話しくださった先生方に感謝を申し上げます。

CPIS Team

総研大の特殊性

沓掛展之

総合研究大学院大学講師
生命共生体進化学専攻

総研大に勤めるようになって、早いもので 6 年半が経ちました。その間、総研大の特殊性を感じさせる体験がいくつもありました。

そのひとつが自己紹介したときに感じられる微妙な緊張感です。「総研大の、、、」と大学名を言うと、相手の顔に居心地の悪そうな表情が浮かぶことがあります。聞き慣れない大学名に戸惑っているのだと思います。海外の研究者はもっと淡白で、表情に表さずに聞き流すことが多いようです。かく言う私も、その気持ちがよく分かります。「総研大」という名前は、ポスドクになるまで知りませんでした。私が専門とする動物の行動・生態の業界では、学会に参加したり、論文に目を通していても、総研大の名前を目にする事はほとんどなかったためかもしれません。研究で一山当てて、総研大の名前を有名にしたいと狙っていますが、今のところ、残念ながらうまく行っていません。

学内でよく耳にする「総研大らしい研究」という言葉も、総研大の特殊性を示していると感じています。「総研大らしい研究」の条件

のひとつは異分野間の学融合であるようです。瓶を振ればオイルと混じるドレッシングのように、シャカシャカとやるだけで異なる学問が混ざり合ってくれればいいのですが、現実はそのようにいかないのが学際的研究の難しいところでもあり、醍醐味でもあると思います。本センターの兼担教員を拝命したことをきっかけに、「総研大らしい研究」とは何かを考え、実践していければと思っています。

南アフリカで研究していたミーアキャットの子育て風景

総研大を離れる日

岩瀬峰代

総合研究大学院大学
学融合推進センター講師

2000 年 4 月に学生として総研大に入学してから 14 年。実に多くのことを学びました。

学生の時は、きびしい師のもとで、「学問とは」「研究とは」…と、みっちりしごかれました。

学位を取得後、1 年のポスドク期間を経て、新しく設立された全学事業推進室で、室長として働き始めたのが、10 年前になります。学生の時に学生セミナー実行委員をやっていたということもあり、様々な分野の学生が 1 つのプロジェクトを行うことにとても興味があったことが、この職についたきっかけです。

しかし、教員として学生セミナーに携わるのと学生として関わるというのは、やはり大きく違っていました。基盤（各専攻の事務の方、教員の方々）との交渉・折衝に多くの時間を割く必要がありました。こちらは、基盤に対する立ち位置も充分にわかっていないので、本当にいろいろと教えてもらいました。基盤の方々と協力して行った日本文化紹介（後学期学生セミナーの直後に開催）では新入生と一緒に基盤を訪問したことはとても印象に残っています。

さらに、学融合推進センターに合流してからは、より基盤とのあるいは基盤間のコーディネーションということを意識するようになりました。研究事業にも関わることが出来たことが、そのような意識を強めたのかもしれません。

そして、私が一番「学んだ」相手は「学生」です。学生セミナーというプロジェクトを遂行する時、学生たちが出すアイデアを実現させるためには、やるべきことが多く、それに応えるためには勉強をしなければなりません。また、異分野のコミュニケーションの重要性を考えさせることをテーマにした時には、私自身真剣に「学際」って何？と考えました。

一緒に活動する中で、はっとするほど大きな学生たちの変化に気がつかされることもありました。学生たち一人一人が違う目的を持って総研大に入学してきたわけですが、総研大で、学位を取って次のステップに上って行こうと頑張ります。研究面で成果を出していく者。海外へ飛び出して行く者。様々な場所で活躍して行きます。すごいと思う反面、もっと効率的に教育の観点で支援したいという気持ちも生まれました。

私は、これから総研大を離れ、学部教育に携わることになるのですが、総研大での様々な経験が、このような方向へ向かわせてくれたのだと思っています。今後は、どんな形にせよ総研大教育に貢献できたら、と思っています。
皆さんへの感謝の意とご発展を心から期して。

葉山の夕暮れ

CPIS Schedule

総研大レクチャー「学術映像の基礎－みる・つくる 2014」の開講について開講

【授業目的・概要】学術研究における映像の活用は、研究対象の把握をより具体的にし、新たな観点から研究を見直すことにつながります。また、研究を促進させてくれるだけではなく、最先端の研究成果を世界に示すうえでも重要な役割をもちます。本講座の目的は(1)映像のリテラシー(映像を批判的に読み解き、使いこなすことのできる総合的な能力)を習得し、それをもとに(2)映像の制作を自身の研究のなかに位置づけ、学術映像を完成させる能力を獲得することにあります。「みる」と「つくる」、この二つのリテラシーを体系的に習得し、学術研究に値する映像を制作していくなかでそれを実現します。

・実施期間:平成26年8月27日(水)～8月30日（土）
・実施場所：長野県飯綱高原 ロッジ・ピノキオ（実習と講義)、国立民族学博物館（成果の講評）
・申込〆切:平成26年8月11日(月)

総研大レクチャー「科学技術倫理と知的財産権―学術研究の適切なすすめ方 ① 基礎編」開講

【授業目的・概要】本講義は、学術研究に求められる科学技術倫理と研究成果物の知的財産権とのかかわりに着目して、学術研究を適切にすすめるための基礎知識を提供する教育プログラムです。学術研究の成果物に加えられるデータ捏造や改ざんなどの行為に起因する社会問題において、学術研究を行う者に対して社会的責任が問われています。その不適切な行為に対して、研究者の倫理的な面の指摘がなされ、掲載論文の撤回や研究成果を無にする事態を招いています。ここに、学術研究の適切なすすめ方が求められますが、そのためには、学術研究の成果物である論文と発明またはソフトウェアに関する権利の関係など法的な面の理解が必要になります。 研究者は、学術研究の成果物（論文と発明またはソフトウェア）に対する権利が認められると同時に、責任が問われることになります。その関係は、学術研究の成果物が論文と発明またはソフトウェアとでは違いがあります。学術研究の成果物（論文と発明またはソフトウェア）にどのような権利が認められ、また不正行為が行われたときにはどのような義務が課され、また科学技術倫理がどのような場面で問われることになるかを理解しておくことが大切です。それに加えて、諸外国や他機関等の研究者と適切に共同研究を行うためには、学術研究の成果物（論文と発明）の権利の帰属やセキュリティに関する知識も必要になっています。

・実施期間:平成26年9月1日(月)～ 9月3日（水）
・実施場所：放送大学学園東京オフィス2階会議室（東京文京学習センター内）放送大学施設
・申込〆切:平成26年8月20日(水)

総研大レクチャー「研究者のための社会リテラシー」開講

【授業目的・概要】研究者が知っておくべき社会に関する知識の中から「科学技術政策」、「研究者キャリアパス」、「科学ジャーナリズム」、「科学コミュニケーション」などに関する入門的な講義を開講する。

・実施期間:平成26年9月2日(火)～ 9月4日（木）
・実施場所：生理学研究所
・申込〆切:平成26年8月20日(水)

The Freshman Course 2013 2nd and Japanese class

【outline】The freshman course is an orientation of Sokendai for newcomers. In this class, we use English only. And also we would like to invite you to register

for the Japanese class. Students who have not yet learned the Japanese language or are beginners in the Japanese language can participate in this class. Total number of participants: approx. 15 to 20 students max.
The Classes are intended to help non-Japanese SOKENDAI students to acquire basic Japanese language skills and understand Japanese culture.

Date: 7th, Oct. 2013~10th, Oct. 2013(Freshman Course)
11th, Oct. 2013~12th, Oct. 2013(Japanese Class)
Place: CPIS Lecture room, Sokendai, The Graduate University for Advanced Studies Shonan Village, Hayama Kanagawa 240-0193 JAPAN
Please Contact us: cpis_member at ml.soken.ac.jp

生命科学リトリート 2014 参加登録のご案内 / Life Science Retreat Registration invitation

【概要】生命科学リトリートは、異なる専攻間の学問的交流により広い視野を持つ人材の育成を目的にした教育プログラムです。
毎年行われる生命科学リトリートには多くの留学生を含む生命科学系の学生が参加しており、英語による研究発表・意見交換を通じて、専攻を超えた人的ネットワークを構築する機会を提供してきました。近年は生命系専攻以外からの参加者も増えてきており、交流の裾野を広げております。

本年度は学生全員による研究発表に加え、生物の体表模様研究で有名な近藤滋先生、クマムシ博士こと堀川大樹先生、両名の招待講演を予定しております。

また「自分の研究を人に伝える（＝研究費を獲得する)」ことをテーマとしたワークショップの開催を予定しており、スペシャルアドバイザーの招致も企画しております。

例年、生命科学系の専攻の学生には原則として本リトリートに参加していただいておりますが、それ以外の専攻の学生、教員のみなさまも、ご興味があればぜひ積極的にご参加下さい。

・実施期間：平成 26 年 10 月 16 日（木）～10 月 17 日（金）
・実施場所：ヤマハリゾートつま恋（静岡県掛川市）
・申込〆切：平成 26 年 8 月 20 日（水）

産学・地域連携による「「奈良のシカ」環境学習セミナー 2014」の開催

【概要】今年度採択された学融合教育事業（学生企画事業）「産学・地域連携による交流型環境教育プロジェクト：「奈良のシカ」の保護活動から学ぶ人と野生動物との共生」は、天然記念物「奈良のシカ」の保護活動に注目した環境学習セミナーを産学・地域連携によって開催するプロジェクトです。

現在は、11 月のセミナー開催に向け準備を進めています。本プロジェクトの一環で結成された「「奈良のシカ」環境学習セミナー実行委員会」をセミナー主催者として、「「奈良のシカ」環境学習セミナー 2014」が開催される予定です。セミナーでは、シカの保護活動の現場や鹿垣の遺構現場などさまざまな現場に着目しながら、都市における人と野生動物との共生について、ともに学び考え、共有することを目的としています。

セミナーは、座学を中心とする初級編と交流会やフィールドワークの組み込まれた上級編とに分かれて開催されます。総研大生は、11 月 28 日（金）～29 日（土）の日程で開催予定の上級編に参加できます。詳しくは 8 月下旬の正式告知をお待ちください。皆さまのご参加をお待ちしています。

（地域文化学専攻　東城義則）

学融合推進センターNews Letter 第 17 号
編集担当：奥本素子
発行人：平田光司
発行日：平成 26 年 8 月 1 日
発行：総合研究大学院大学
学融合推進センター
©CPIS, 2013 All Rights Reserved